# ソクラテスの知識概念
## ――『エウテュプロン』における単一の相の探究――

大草　輝政
Terumasa OHKUSA

知者を自負する対話相手たちは，問答を通じて次々とアポリアーに逢着する。このようなとき，ソクラテスは，対話の手続きに，知識概念の再定位ないしある重要な見直しを介在させているのではないか。以下では，主に『エウテュプロン』を扱いながら，ソクラテスの要求する知識について再考を試みる。

## I

ソクラテスはエウテュプロンに言う。

> それでは覚えているかね。ぼくがきみに要求していたのは，そんな，多くの敬虔なことのうちのどれか一つ二つをぼくに教えてくれることではなくて，すべての敬虔なことが，それによってこそ，いずれも敬虔であるということになる，かの相そのものを（ἐκεῖνο αὐτὸ τὸ εἶδος）教えてほしいということだったのをね。だって，たしかきみは，不敬虔なことが不敬虔であるのも，敬虔なことが敬虔であるのも，単一の相によって（μιᾷ ἰδέᾳ）であると主張していたのだからね。それとも思い出さないかね。…その相それ自体（αὐτὴν τὴν ἰδέαν）がいったい何であるかをぼくに教えてくれたまえ。ぼくがそれに注目し，それを基準として用いることによって，きみなり他の誰かなりが行なう行為のうちで，それと同様のものは敬虔であるとし，それと同様でないものは敬虔でないと明言することができるようにね。　（*Euthphr.* 6d9-e7）

もともとソクラテスは，「敬虔とは何であるか」と問いかけている（*Euthphr.* 5d2，5d7）。それは，単一の相の要求（*Euthphr.* 5d4, μίαν τινὰ ἰδέαν）であり，

事例を挙げることで応じようとするエウテュプロンの回答は斥けられている。ソクラテスが単一の相を問うのは，それこそが，「すべての敬虔なことがそれによって敬虔になる（ᾧ πάντα τὰ ὅσια ὅσιά ἐστιν）」原因に相当するものであり，また，「それに注目し（ἐκείνην ἀποβλέπων），それを基準として用いて（χρώμενος αὐτῇ παραδείγματι）」こそ，いっさいの敬虔なることを明言できるような判別基準を提供すると考えるからである。「～とは何であるか」という問いは，対話篇を横断し，随所において確認されうる[1]。P. T. Geach は，典拠として先の『エウテュプロン』の箇所のみを示しつつも，広く一般化される特徴として，ソクラテスの抱く想定を次のように定式化する[2]。

(A) もしあなたが，ある用語 T' を自分が正しく述定していると知っているのならば，あなたは，事物が T であるための一般的基準を示すことができるという意味で，「T であるとは何であるかを知っている」のでなければならない。

したがって，

(B) T である事物の事例を示すことによって，T' の意味に到達しようとしてもむだである。

Geachは，（B）が（A）からの帰結であるとし，この二つの想定を，「ソクラテスの誤り（*Socratic fallacy*）」と裁定する。いま慣例に従って，ソクラテスの「何であるか」という問いを，定義の問いとして言い換えるなら，上記の想定の虚偽性について，Geachは次の事実に訴えていることになる。すなわち，われわれは自らの知を表現する場合に，そこに含まれる用語を定義できなくても，たくさんのことを知っている，と[3]。

ところが，事例の認知は，ソクラテスの対話進行において重要な役割を果たす。それは，対話相手が，ソクラテスの問いの意図をうまく咀嚼できない場合，あるいは回答として提示された定義の妥当性を吟味する場合に顕著である。例

---

[1] *Chrm.* 176a6-b1, *La.*190b8-c2, *Prt.* 361c2-6, *R.* 354c1-3, *Ly.* 223b, *Hi. Ma.* 304d5-e3, *Men.* 71b1-3 etc. Cf. Benson [2000] p. 114 n. 10.

[2] Geach pp. 370-372.

[3] Geach p. 371.

えば，そのようなとき，ソクラテスは，自ら事例を用いて問いの射程を説明し直そうとする[4]。「戦列に踏みとどまって敵を防ぎ，逃げようとしない人があれば，それは勇気のある人だ」とするラケスに対し，ソクラテスは，逃げながら戦う人も勇気があること，あるいは，病や貧乏に対して，苦痛や恐怖に対して，また欲望や快楽に対して立派に戦う人も勇気あることに注意を促す（*La.* 191a-d）[5]。よって，ソクラテスにおいて問題となるのは，事例の使用でなく，その身分である[6]。

ソクラテスの想定を次のように再考することができる[7]。

(1) 敬虔の定義知は，特定の行為が敬虔であると知るための必要条件である。

(2) 敬虔の定義知は，特定の行為が敬虔であると判断したり信じるための必要条件である。

(2) は，Geachがソクラテスに帰す想定（A）に連なるけれども，ソクラテスが抱く想定は，むしろ（1）である，と。このような修正は，ソクラテスの事例使用を可能にする。というのも，それは，知識と思わくの区別を強く含意し，ソクラテスが思わくの内で自在に探求することを可能にするからである。

しかし，このことよっていくつかの問題点も浮き彫りにされる[8]。とりわけ，知識と思わくの異質性に立脚したこの修正は，ソクラテスの知識の表明箇所と抵触する可能性を争点として迎え入れる。時に，ソクラテスはさして重大でな

---

[4] *Euthphr.* 9e4 sqq., *Men.* 72d2 sqq. , 73c9 sqq. , 74a11 sqq. , *Hi. Ma.* 287e5 sqq. etc.

[5] この箇所のソクラテスの＜勇気＞の事例の拡大は，しばしば，'co-extensivity' の要請といわれる（Cf. Kahn p. 172, Benson [2000] p. 108 n. 35）。

[6] Cf. Burnyeat [1977] p. 384.

[7] 続く (1) (2) の区別はSantasの議論に準じる（Santas [1979] pp.311-312 n. 26）。

[8] ソクラテスが（1）を抱いていたことは，Santasも認めるように，『リュシス』と『ヒッピアス（大）』のテクストから必ずしも決定的な結論として導かれない。Kahnは，『ヒッピアス（大）』だけが「ソクラテスの誤り」を犯すことから逃れることができないとして，このことを，『ヒッピアス（大）』が偽作であると推定する根拠のひとつに数える（Cf. Kahn p.182）。その他，Beversluis，Vlastosは，これらの対話篇を 'post-elenctic' な対話篇として扱う（Beversluis [1987] pp. 218, 221 n. 4, Vlastos [1990] pp. 3, 14 n. 11）。

いとされる知あるいは皆が持ちうる知識を提示し（*Euthyd.* 293b-c，*Ion.* 532d-e etc.），また探求途上にあると思われる定義に密接に関わる知識を表明するように見える（*Ap.* 29b，37b，*Euthyd.* 296e-297a etc.）[9]。これらの典拠に配慮するとき，次のように問われうる。つまり，知識と思わくの峻別とは，中期対話篇に描かれる認識論の逆照射ではないか，と。たしかに，比較的初期の対話篇においては，知識と思わくの対立関係が，必ずしも理論化された形で明示されるわけではない[10]。

それにもかかわらず，プラトンが常に知識と思わくの区別を重視し，その使い分けに慎重であったであろうことに対しては，ある確かな形跡を挙げることができる。すなわちそれは「知らないのに知っていると思いこむ無知」というあり方への変わらぬ警戒の視点である。「知っていること」と「知っていると思いこむこと」の厳格な区別は，対話篇を問わず繰り返される[11]。ただし，このような一貫したモチーフは，ソクラテスに思わくのみを帰すように働くとは限らない。むしろ，知識と思わくの鋭い対比のもとで，あえてソクラテスが知の表明をおこなうとすれば，その知に，かえって軽減不可能な力点が与えられることになる[12]。

## II

---

[9] さらに，その他，職人あるいは舵取りに，一定の知が帰される（Cf. *Ap.* 22c-e，*Grg.* 511e-512b）。ソクラテスの知識の提示箇所の検討は，Vlastos [1985] の他，Cf. Lesher pp. 280, 285 n. 13，Beversluis [1987] pp. 219-221，Brickhouse & Smith [1994] pp.36-37，[2000] pp. 101-113 etc. また，cf. Benson [2000] pp. 222-238。

[10] Beversluis [1987] とVlastos [1990] は，Geachによる想定が，彼の含意に反して，「ソクラテス的」ではないとする（その他，cf. Kraut [1984] pp. 276-277，Vlastos [1985] p. 26 n. 65.）。Cf. 注8. なお，中期対話篇以前において両者が対置されるのは，かろうじて『ゴルギアス』454b3-e9，また，知と正しい思わくの区別が説かれる『メノン』97a6-98c3 など。

[11] *Ap.* 29a-e，*Alc.* I. 117d-118b，*Chrm.* 166d1-2，167a4-5，*Men.* 84a-c，*Smp.* 204a，*Phdr.* 275b，*Tht.* 210c，*Sph.* 229c，*Plt.* 302a-b，*Phlb.* 48c-49a，*Lg.* 732a-b，863c etc.

[12] とくに，*Ap.* 29a-e。多くの人が抱く死の怖れとは，知らないことを知っていると思い込むことに帰趨するとの確認を経た上で，ソクラテスの29b の知 ——不正をなすということ，神でも，人でも，自分よりすぐれている者があるのに，これに服従しないことが悪であり醜である——は提示されている。

ソクラテスが一定の仕方で事例を是認していることによって，Geachの（B）が掘り崩されるならば，「何であるか」の知が，事例判別のための必要条件であることを意味する（A）はどのように見直されるだろうか。ひとつの選択肢は，「何であるか」の知が，事例判別のための必要条件ではなく，むしろ十分条件であるというものである。テクストも，そのことを支持するように見える。すなわち，「敬虔とは何であるか」を知るならば，特定の行為が敬虔であるか否かを明言できる，という当該箇所の推論は，額面通りに受け取れば，「何であるか」の知が，Geachが指摘するような必要条件ではなく，事例明言のための十分条件であることを表している。さらにそこでは，「すべての敬虔なこと」「きみなり他の誰かなり」の行為の判別といった，事例の任意性が示されている。さらに，そもそもことの発端となる問題も，エウテュプロンが息子の身でありながら，彼の父親を起訴する——しかも，それはある召使いを泥酔の上で殺害した別の召使いの処置を決める間，エウテュプロンの父がその召使いを放置することによって起こった，殺人のかどで——のは不敬虔であるかどうか，という，きわめて煩瑣な事例の判別に関わるものである。このように見るならば，『エウテュプロン』の当該箇所でソクラテスが求めている知は，意見が対立し，判別困難な事例まで正確な判定に導くような知であり，それは，「ソクラテスの誤り」に描かれるような事例判別の必要条件としての知ではないと結論されうる[13]。

ただし，テクストの文脈は，それ以上の含意を告げている。もともとエウテュプロンが自認しているのは，敬虔と不敬虔にまつわる，そうしたいっさいのことの正確な知（5a1-2, τὰ τοιαῦτα πάντα ἀκριβῶς εἰδείην）である。その自認は第一に，諸事例の知識に向けられていたことだろう。彼の最初の回答も，事例の提示に終わっている。ところが，ソクラテスは，エウテュプロンが自認を表明してはいなかったところの単一の相の知の提示を求める（5d7, τί φῂς εἶναι τὸ ὅσιον καὶ τί τὸ ἀνόσιον）。むろん，ソクラテスの問いの妥当性を，エウテュプロンが受け入れるかぎりで対話は進行するのであるが（5d6, Πάντως δήπου, ὦ Σώκρατες.），そうだとしても，やりとりの出発点におけるこのような二人のずれを穴埋めするには次のように考えることができる。すなわち，「敬虔なること（τὰ ὅσια）」を知っているならば，「敬虔（τὸ ὅσιον）の何であるか」を知っているとソクラテスは想定している，と。エウテュプロンもまたそのことに同意するかぎりで，少なくとも二人の間では，このとき，「何であるか」の知が必要条件として機能しているのではないか。

---

[13] Cf. Santas [1972] p.136, [1979] p. 116, Kraut [1984] p. 209 n. 38, Vlastos [1985] p. 23 n. 54, [1990] p. 7, Beversluis [1987], Kahn pp. 157, 181-182, Benson [2000] pp. 144-147.

## III

エウテュプロンに帰された特異な立場に注目し，「何であるか」という問いの射程についてさらに問い直してみたい。

> しかしそれならきみの方は，ゼウスにかけて聞くが，エウテュプロン，神々の法について，また敬虔なことや不敬虔なことについて，それらがどうあるものか（ὅπῃ ἔχει）をそんなにも正確に知っていると思っているわけかね（οὑτωσὶ ἀκριβῶς οἴει ἐπίστασθαι）？　（*Euthphr*. 4e4-6）

エウテュプロンの知恵がいかにはるか先まで進んでいると予想されるかということは，「いったい何が，ものごとの正しいあり方であるのか（ὅπῃ ποτὲ ὀρθῶς ἔχει）」を知り損ねている多くの人々のあり方（ἀγνοεῖται ὑπὸ τῶν πολλῶν）との対比において，示されている（4a11-12）。エウテュプロンの一点の曇りさえ見られないような自信は，訴訟を起こすことで，ひょっとしたら反対に彼の方が不敬虔な行為をしていることになるのではないか，と恐れることもないほど（4e）であり[14]，ソクラテスに，恐れや恥とは無縁であるとの印象を与えるエウテュプロンは，彼自らも，そうしたことすべてを正確に知っているはずであることを請け合う（5a1-2）。

これらによって，ソクラテスは，エウテュプロンを知者と想定した質問を投げかける。かくして，ソクラテスがエウテュプロンに求める知は，あらゆる敬虔な行為において自己同一である＜敬虔＞であり（5d1-5），その単一の相によってこそ，すべての敬虔なること――事例のあり方に例外は想定されていない[15]――が敬虔であることになる，かの相そのものに収斂する。その相に注目し，それを基準として用いることによれば，例えば，メレトスらがソクラテスに対して起こした公訴の事例なども含め，さまざまな諸事例が敬虔であるか否か，正しく判別することが可能となる。エウテュプロンによるソクラテスへの第一

---

[14]あるいは，次のソクラテスの言葉にもうかがえる。「いや，むしろきみは，そんなことをすることで，もしかしてきみの行為が正しくないものになるかもしれない危険を冒すことのないように，神々をも恐れ，人々をも恥はばかったことだろうからね（*Euthphr*. 15d）」

[15] よって，定義は，それが事例に適用される範囲が広すぎることも狭すぎることも許容されない。Cf. 注5.

の応答：「敬虔とは現在私が行っていること」は，この意味で，ソクラテスが要求する類の知識からかけ離れている。つまり，エウテュプロンの提示しようとする知識は他の局面への応用がきかず，敬虔なこと不敬虔なことについて，いかにしてそうであるのかという，個々の事例の原因を含めた理解の深まりを与えない。ところが，ソクラテスの関心は，まさにそのような知識に向けられている。ソクラテスは，カルミデスに言う。

> いや，きみは，あるものがそれぞれどのようなありようをもつ（ὅπῃ ἔχει）ものなのか，それが明らかになるということは，いわばすべての人間にとって共通のよいことであるとは思わないかね。　（*Chrm.* 166d4-6）

ソクラテスの主張において，確信と知の否認が交錯するのも，以下のような局面である。

> こういったことがらは，ぼくたちにとってはすでにもうさきの議論のなかで，いまぼくが述べているような形で明らかにされたものなのであるが，いささか無遠慮に言うことをゆるしてもらえるなら，それは鉄と鋼のような論理によってしっかりと拘束され，縛りつけられているのだ。すくなくとも，こうして見たところそのように思われる。この堅い論理の縛めを，きみなり，あるいはきみよりももっと血気さかんな他のだれかなりが，打ち破って解き放つのでない限り，いまぼくが述べているのと違ったことを主張してみても，それはしょせん，正しい言説とはなりえないであろう。じじつ，ぼくとしてはいつも同じことを言うことになるが，こうしたことがらがほんとうはどうであるか（ὅπως ἔχει）をぼく自身は知っているわけではないけれども…（*Grg*. 508e6-509a5）

ソクラテスの関心は，いかにしてそうであるのかということに説明を与えうるような知識であり[16]，それは，例えば，異論の余地が生じる状況において，なお正確な判定を下すことのできる知者，助言者に要請される知識であると思われる[17]。またそのような包括的な知が要請される局面では，「何であるか」の知識は必要条件としても問われているのではないか[18]。

---

[16] Cf. *Euthd.* 278b5, τὰ πράγματα … πῇ ἔχει, *Men.* 84b10, ὅπῃ ἔχει, *Cra.* 420b5, ὅπῃ ἔχει τὰ πράγματα etc.

[17] *La.* 194a4, cf. Brickhouse & Smith [1994] pp. 49-51.

[18] なお，Brickhouse & Smith は，こうした着眼から，'know how ( know why )' と

エウテュプロンの第一答は，彼自身の行為が敬虔であると認めるかどうかをソクラテスに一方的に迫るものであるのに対し，他方，ソクラテスの単一の相の要求は，できるだけ遠くに厳格な知を設定することにより，たとえ対話を構成する二人が行き詰まりがちになるとしても（Cf. *Euthphr*. 11b-e），かえって，幾度もその同じ問いへと立ち返りつつ（*Euthphr*. 9c5，11b2，4-5，15c11-12），ひとつの問題について，いつの間にか二人が共同して，多角的に吟味することを可能にするような探求の余地を与えている。

ソクラテスの探求において対話が成立し，また一定の事例の意義が失われず，さらに，その中で，判別基準の探求に倦むこともない可能性が開かれるのは，こうしたソクラテスの知識概念との関わりにおいてであるように思われる。

（京都大学・西洋古代哲学史・博士課程）

## 文献

Allen, R. E. [1970]. *Plato's 'Euthyphro' and the Earlier Theory of Forms*. London.

Benson, H. H. [1990]. "The Priority of Definition and the Socratic Elenchus", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 8, 19-65.

———. [2000]. *Socratic Wisdom*. Oxford.

Beversluis, J. [1974]. "Socratic Definition", *American Philosophical Quarterly* 11, 331-336.

———. [1987]. "Does Socrates Commit the Socratic Fallacy? ", *American Philosophical Quarterly* 24, 211-223.

Brickhouse, T. C. & Smith, N. D. [1994]. *Plato's Socrates*. Oxford.

———. [2000]. *The Philosophy of Socrates*. Colorado.

Burnet, J. [1924]. *Plato's Euthyphro, Apology of Socrates, and Crito*. Oxford.

Burnyeat, M. F. [1977]. "Examples in epistemology: Socrates Theaetetus and G. E. Moore", *Philosophy* 52, 381-398.

Geach, P. T. [1966]. "Plato's *Euthyphro*: An Analysis and Commentary", *Monist* 50, 369-382.

Irwin, T. [1977]. *Plato's Moral Theory*. Oxford.

---

'know that' の区別を導びいている（cf. Brickhouse& Smith [1994] pp. 38-45）。「いかにしてそうであるのか」に説明を与えるような知識に，ソクラテスの関心があるということに私も同意する。ただし，それは，必ずしも「知識」という用語法の二重化の操作（cf. Vlastos [1985] ）を要しないと思われる。「知る」とは，なんらかのことを知ることであり，その主張や否認は，問われている知識の内容に依存すると考えられる。

———. [1995]. *Plato's Ethics*. Oxford.

Kahn, Ch. [1996]. *Plato and the Socratic Dialogue*. Cambridge.

Kraut, R. [1984]. *Socrates and the State*. Princeton.

———. ed. [1992]. *The Cambridge Companion to Plato*. Cambridge.

Lesher, J. H. [1987]. "Socrates' Disavowal of Knowledge", *Journal of the History of Philosophy* 25, 275-288.

Nehamas, A. [1986]. "Socratic Intellectualism", *Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy* 2, 275-316.

———. [1998]. *The Art of Living*. Berkeley and Los Angeles, California.

Santas, G. X. [1972]. "The Socratic Fallacy", *Journal of History of Philosophy* 10, 127-141.

———. [1979]. *Socrates*. London.

Vlastos, G. [1985]. "Socrates' Disavowal of Knowledge", *Philosophical Quarterly* 35, 1-31.

———. [1990]. "Is the 'Socratic Fallacy' Socratic? " *Ancient Philosophy* 10. 1-16.

Woodruff, P. [1990]. "Plato's early theory of knowledge", in Everson, S. ed. *Companions to ancient thought 1 Epistemology*, Cambridge, 60-84.